
異端一吸血鬼事件一

彩葉 陽文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異端一吸血鬼事件一

【Nコード】

N1926Y

【作者名】

彩葉 陽文

【あらすじ】

もう、9年くらい前に書いたファンタジー要素のある現代ものです。

推理小説ちっくな書き方だけでも、決して推理小説とは呼びたくない、そんな感じのお話でございます。後半の展開の盛り上げ方の甘さとか、色々とプロットに難があるものの、捨てるのはなんとなくもったいないのでここに投稿します。多少は手直しをしつつ掲載していくつもりだけれども、大筋はもう、手を加えるつもりはあまりありません。ええと、元々は友人の個人サイト『Station』

にて『依夢』という名前で掲載してもらっていました。完結前に更新されなくなってしまったので、ずっと放置していました。そうしてもう、ええと、8年ですか？ 色々複雑な気分なのですが、うん、まあ、期待せずに目を通してみて下さい。

登場人物紹介

キョウ .. 主人公。語り部。
ハク .. キョウの親友。フジヤの相談役。頭が良い。
シユン .. キョウの親友。幼馴染。寡黙。
チコ .. キョウの親友。ハクが好き。笑い所がわからない。
ユウナ .. キョウの親友。純和風フランス人。
シホ .. 殺された少女。チーム《銀の弾丸》の一員。
タダシ .. シホの恋人。チーム《銀の弾丸》のリーダー。
寺田里穂 .. シホの妹。
フジヤ .. ハクの旧友。《クレスト》のリーダー。
アオ .. フジヤの護衛。双子の兄。
アカ .. フジヤの護衛。双子の妹。
石本哲二 .. 刑事。
宮城雪芽 .. 刑事。アニメ声。
楽土の婆 .. 占い師。魔女。情報遣い。
紺野さん .. 魔女の弟子。

序

たとえば、大人の世界と子供の世界。

世界の二極分化。

善と悪を論ずるように、正と邪を論ずるように、神と魔を論ずるように、光と闇を論ずるように、ある人は——もしくはより多くのある人々は——大人と子供の世界を区別し、明確に、決定的に対立する存在として論じた。

汚いものを、醜いものを、臭いものを、見たくないものを、一方的に、片方の都合など微塵も考えず、闇に怯えるように、光から目をそらすように。

片方が片方を絶対的に否定し合うという構図を作り出す思考は、つまりは、理解する努力を放棄した、一種の『逃げ』なんじゃないかと、ぼくは思ったりする。

お前の考えていることはわからない。

子供は親の言うことを聞けばいいのだ。

大人は何もわかつちやいない。

それは古い考えだ。

et cetera...

いつもどこからか、そんな声が、聞こえてくる。

それはいつも変わらない。

いつまでも変わらない。

どこまでいっても変わりはしない。

ヒトの心は、いつまでも進歩しない。

ヒトという種がアフリカのジャングルで発生して以来、約五万年。科学技術こそ順当に進歩していったとはいえ、それはあくまでも記録と経験の蓄積の結果に過ぎず、人間という種自体の進化を示す証左には到底ならない。人間の脳の構造自体は、五万年の昔から何の

変化もしてない。つまり、多少は「知的」になったとはいえ、精神的にはジャングルで猿と縄張り争いをしていた時代から、そう大しては——ずばり言ってしまおうと——ほぼまったく、変化していない。そして人が人である限り、これからおそらく、それほど劇的な変化は望めないだろう。

だからと言って、悲観する必要はどこにもないと思う。

科学技術はこれからもますます発展して、人類社会は進歩し続けるだろう。

進歩によってどんどん豊かになれば、弱いもの、小さいものへ目を向ける余裕も生まれるはずだ。

汚いものを、醜いものを、臭いものを、見たくないものに視線を向けることもあるだろう。

どんどん優しくなっていくだろう。

今よりも、もっと。

たぶん、きっと。

——もちろんそんなの、単なる戯言にすぎないけれども。

進歩というのは複雑化していくことだし、便利になるそれ以上の速度で複雑化は進行していて、すべての事象の細部まで行き届く目は、ますます稀少なものとなっていく。機械の支援を受けて、知覚を広げても、人間それ自体のスペックには、自ずと限界はやってくる。そして、末端の存在から、見えなくなっていく。

現実的な未来予測は、とてもではないが余裕など存在しない、ひどく硬質な寒々しい世界を描く。

けれど、だけれども、いつしか誰もが穏やかに暮らせる時代がやってくる。

それは甘い甘い練乳のような未来の情景。

硬質なる理屈の外にはみ出した、あり得ざる時代の憧憬。

そんな夢を許容する程度にはまだ、人間という種に救いは残さ

れているはずだった。

今まで見てこなかったものに視線を向け、言葉を使い、名をつけることによって、そこに新たな認識が生まれる。

未知は既知となり、不安は安心へと転ずる。

その結果——とは必ずしも言えないかもしれないが——今世界は、大人と子供、そして幼児の世界に三分化されている（二極分化の世界よりかは安定性は高い）らしい。

幼児の時代は世界に疑問を持ち、未知は好奇心を生み、人は夢を見て、望むままに毎日を生きる。

子供の時代は世界への疑問を忘れ、未知は恐怖心を生み、人は夢を捨て、望まれるままに毎日を生きる。

大人の時代は世界への疑問を思い出し、未知は対抗心を生み、人は夢を創り、望む毎日を生きようとする。

ほら、誰だって覚えがあるだろう？

幼児の頃は目に映る何もかもが新鮮で、親や、周りの大人たちに聞いて回ったはずだ。

「ねえねえ、これなあに？　なんていうの？」

だが、そんな無邪気な時代はすぐに終わり、すべての疑問を忘れ、大人の言葉を素直に聞き、学校と塾と習い事を繰り返すだけの、子供の時代がやってくる。それは期間にして十五年前後の、長い人生の中でも四分の一にも満たない時間ではあるけれども、体感時間ではおそらく最大の時代だ。時折大人になれず、子供のまま歳を取っていくやつもいることだし。

口の悪い友人、ハクに言わせれば、世の中の大多数の成人ってやつは、夢を見ることがもなく、疑問を持つこともない、大人になれなかった子供なんだそうだ。アダルトチルドレン。その証拠は毎日会社へ行って帰るだけの人生。そこには夢も希望もない。人生の墓場だ。

ぼくには異論がある。

会社に行って帰るだけの人生の中で、本当に夢も疑問も忘れてい

るのか？

学校へ行き、塾へ行き、習い事へ行く人々は、本当に夢も疑問も持っていないのか？

そうは思わなかった。いや、中には、もちろん、そんなやつもいるのだろう。

けれども、人によってその理由は様々だろうが、夢や疑問を持ちながらも、会社や、学校や、塾や、習い事へ行く人々も、相当数いるのではないだろうか？

例えば護るべき者のために。例えば夢につなげる一手段として。例えばそれ自体を夢へとするため。すべての疑問を忘れず、疑問を承知したままで、あえて仮面の日々を送る人も、いるのではないだろうか？

「あははっ。キョウ。お前、ホントにお人好しだな」

なぜか笑われてしまった。

どうしてだ？

理由がさっぱりわからない。

しかしともあれ、この物語内では仮面の日々どころは、実はあまり関係のない問題だったりする。

さて、いささか唐突ながら、ここでひとつ疑問を提示してみよう。

——異端とは、何か？

異なるもの。端にあるもの。本流から外れたもの。

社会の中にいることのできないもの。

領域外に棲まうもの。

弾き出されたもの。

カテゴライズされないもの。

——特殊性の強いもの。

例えば、ぼくらの住む光花市と、その周辺を含む安芸塚と呼ばれ

る一帯は、古くから七つの特殊な家系が、支配しているのだという。
光花の深宮家。

素土の月ヶ瀬家。

大伎の橘家。

上弦の七夕津家。

塚代の杜代家。

風森の宇都羽家。

山舞の舞姫家。

七つの家は、古い伝承によるとそれぞれ異なる属性を有する土地神の末裔で、血筋はそれを示す神通を受け継いでいるらしい。

もっとも今ではその力もずいぶん小さくなって、七夕津家ではその片鱗すらも失われたというし、本来七家の盟主であるはずの深宮家の血筋は、疾うの昔に耐えて久しく、橘家や宇都羽家もすでに傍流しか残っていないという。

ともあれそれらは極まった特殊性。

特殊でありすぎた為に弾き出されながらも力を持ち、反転して中心に踊り出た、異端中の異端。

しかしそれらは、際立った例外中の例外に過ぎず、ほとんどの異端は中心に達するまでには到底進むことができずに社会の外に弾き出され、消えてしまうものだけでも――

例えば、それはぼくら。

ぼくと、ぼくの仲間たち。

際立った異端には程遠く、けれどもどこか『違う』と感じている者たち。

自覚しているしていないに関わらず、他の普通に社会生活を営んでいる子供や大人や幼児たちの『仮面』を被ることができなかった、不器用で弱い異端たち。

腐ったリングではないけれども、集団の中に異質なものが混じると排除するように働くのは、免疫機構を持ち、日々病原体ウィルスと戦い続けている生命体であるところの人間としては、ある意味本

能とも言え、仕方のないところではある。

——ように思う。

したがって、学校やら塾やら習い事やら、あるいは会社やら、いわゆる『正常な』社会から排除されてしまったぼくたちは、目的を見失い、引きこもりになったり、逆に意味もなく街へ出て行ったりする。

けれども人間、独りじゃ生きていけないもので、結果、同じように社会から弾き出された仲間たちを見つけて、つるんだりするのだ。異端同士の異端な集まり。

ぼくらは世界に疑問を抱き、しかし答えを見つけられず、未知に對して戦いを挑み、しかし手段がわからず、夢を見て、しかし対象は曖昧で、望む毎日を生きようとして、もがき続けている。

中途半端な、狭間の存在。

境界上にある、世界の隙間に隠されたもう一つの時代。

どれほど詳細に世界を観察しようとも、どこかに名前のない存在がある。

いくつもの事象を観察し、名付けて、認識を深めていこうとも、どうしても取り残されてしまう存在はいる。

どこまでも、いつまでも、いて、いなくなることはない。

細切れにされ、小さく分かれたひとつひとつを区別し、名を付けていったとしても、より小さく、どこまでも小さく、細分化の連鎖に果てはない。

いくつもの境界に名を付けていったとしても、名付けられた境界と外部の境界に、さらに名を付ける余地が生じてしまう。

ぼくらは、名付けられたばかりの子供な大人。

ぼくらの外に溢れる人も、すぐに出てくるだろう。

まあ、そんなこと、いくら境界の住人であるぼくらが語ってみたところで、当事者である以上は単なる自己陶醉以上のものにはならないのだけでも。

ああ、その通りかも。

誰がどうだと明示するつもりはないけれども、ぼくらは確かに学校や会社に通って帰るだけの、『普通』の生活は出来なくなつた。なつてしまつた。

ある者は体育系家庭に生まれた文系人間であるために、家族に馴染めず、家を出るという選択肢以外を持たなかつた。

ある者は伝統的に血を重んじる名家の格式に反発し、出て行つた。

ある者は双子の二番目であるがゆえに『いない者』として扱われた。

ある者は他者とのコミュニケーションが体質的に取りにくく、自然と独りになつていった。

ある者は一つの目的を盲目的に追いすぎるがゆえに周囲を顧みず、戻ることが出来なくなつた。

ある者は純粹な日本人の血を引きながら日本人ではないという複雑な立場ゆえに周囲に対して自ら壁を作つた。

ある者は他人に依存することに依存するがゆえに人に見捨てられていった。

ある者は特殊な能力や才能、思想ゆえに周囲を混乱させた挙句、排除されていった。

誰が誰とは言わない。理由がこれだけに限られるとも言わない。因果関係がこの通りだとも言えない。

理由は複合的だし、原因は多角的であるべきだし、社会は紙に書かれる文章よりもっと複雑だ。単純に、簡単に、当たり前のように自らの暗部を「あなたはこうである」と言い当てられていい気分になる人はいないだろうし。

けれどもまったくのでたらめではなく、ぼくが今排除したばかりの「真実の一端」ってやつを、その論理は確かに捉えているのだろうと、思い直してみたりもする。

興味がないなんて、本当は言つてはいられない、極々身近にある問題なのかも。

ぼくらの仲間がどうして成立する次第になったのか、実はあまりよく覚えていない。

ぼくらの仲間。

つまり、ぼく、ハク、チコ、ユウナ、シュンの五人。

一年くらい前から一緒にいて、遊んでいた。去年の花見の時にはすでに同じグループで活動していたような記憶もあるけれども、五月の連休は別々だったような記憶もある。どうにもはっきりしない。気がついたら、いつの間にか一緒にいた——てなことをハクに言ったら、やつは延々と小一時間かけてぼくらが出会った物語を語り——もしくは、騙り始めた。

「なんだと？ キョウ。お前、忘れたのか？ おれたちの、出逢ったあの事件を。衝撃的で、感動的で、歴史的で、画期的なストーリーを？ ひどいやつだな。それでも友達か？ それでも親友か？ お前は、一生の思い出にすると誓った物語を、本当に覚えていないとでも言うのか？ そうか。ならいいさ。おれにとっては宝石のごとき輝ける思い出としても、お前にしてみれば埃にも満たない瑣末な事象にすぎなかったのだろう。お前がそれでいいというのならば、それでもいいさ。お前は友達だ。親友だ。そんなお前でも、おれは受け入れてやろう。おれたちは受け入れてみせよう。それでこそ友達だろう？ たとえそいつが人を人とも思わない非道なやつだろうとも。人の心を踏み躪ることに快楽を覚える邪悪な性質の人物であろうとも。それでも受け入れ、共にいるのが友達というやつだ。そうだろう？ だから、お前が忘れたのならば、それでいい。おれたちはお前を許すだろう。そんなお前でもおれは心を傾けてやろう。さしておれの心は広いともいえないが、少なくとも、四畳半よりは広いと自負している。お前一人くらい、入る余地はあるさ。しかし聞け。確かに忘れるという行為は人間に不可欠な能力だ。忘れるという行為自体は至極当然のものであって、お前には何の責任もない。お前には何の罪もない。だがな、それでも忘れてはならないものと

いうものが、燦然と宵空に煌めく明星のような記憶が、どこかに、しかし確かに存在すると思うのだ。特に、ある種の関係性の於いて片方が大切にしている記憶ならば、なおさらだ。友達には相手の過ちを正し、互いに高め合うという側面もある。だから語ろう。お前が二度と忘れないように。思い出すように。お前の脳髓に楔をもつてして刻みつけるように、語ってやろう。これがおれたちの、出会いの物語だ」

そして静粛に、厳然とハク語り始めた。

それは語られた伝説。騙られた神話。

「紀元前五世紀の古代バビロニアの……」

「待てこらっ！」

ぼくはハクの頭を平手で叩き飛ばした。

「ん？　なんだ？」

かなり力を込めて叩いたつもりが、ハクはまったく、蚊に刺されたほども感じてないようで、平然として聞き返してきた。少し口を尖らせているのは、渾身の話を中断された不満の表れだろう。

「なんで、ぼくらの出会いを語るのに、紀元前から話さないといけないんだ！」

「そうよ、おかしいわよっ！」

ぼくが怒鳴ると、ユウナもぼくに加勢して来た。少しうれしい。

「せめて五年くらい前から話さないよっ！」

いや、ユウナ。ぼくらが出会ったのはせいぜい遡って二年前だし。もったも、ぼくとシュンに限って言えば、幼馴染という間柄で、小さいころから互いのことを知ってはいたのだけれども。

「いや、ユウナ。五年では近すぎる」

「なぜっ！」

あくまでも平然と返してくるハクに対して、ぼくは再び怒鳴り声を張り上げる。

「ん？　まさか、キョウにユウナ。お前たちは人間の『選択』というものはその人個人の意思のみで成立していると言っても言うのか？」

『私は私が存在するから存在している』などと思っているのか？」
「えー？ 何言ってるの？ 私が存在しているから私が存在してるのは当たり前でしょう？」

「はんっ。ユウナ。それはひどく傲慢な考えだぞ。独善的な思考だぞ。個人は個人の意思のみで成り立ってるって？ そんなものは幻想だ。妄想だ。個性というものは人との関係性の中で成立するものであって、決して人一人にすべての根拠が立脚しているものではない。それひとつでは、決して成立しないものだ。唯一の例外は多重人格ってやつだろうが、この場合は除外してもいいだろう。ユウナにも、キヨウにも顕現するほどの多重性は確認できないからな。精神面での根拠もそうだが、人間の物質的存在原因についてもやはり一人では到底成立しない。おれたちは両親がいて、初めて生まれる存在だし、その両親にも両親がいるだろう。そもそも人間の原因にも猿人・類人猿がいるし、それらの原因も原初哺乳動物、原初脊椎動物、それこそ原始たんぱく質まで遡れ、地球の誕生、太陽系の誕生、銀河の誕生、宇宙の誕生まで遡れる。紀元前でも話にならないくらい近すぎるな」

いや、何か、問題がひどく違うような気がしたけど。
ハクはあくまでもまじめな表情だった。

「あはははあはははっ。『せきついどーぶつ』だって。さすがハクっ！」

いきなり耳に痛いほどの甲高い笑い声を張り上げて、ハクに抱きついていったのはチコ。

なぜ、そこで笑う？

どこかに笑うポイントがあったか？

この子もよくわからない子だ。いつもこんな感じで、唐突に、よくわからない部分で笑う。そして、誰もが笑う場所で笑わない。

「というか、紀元前まで遡って、私たちの出会いをきちんと因果を踏まえて説明できると考える方が傲慢のような気がするんだけど……」

頭痛を抑えるように、呆れたようにユウナは頭を抑えてうめき声と共に言葉をもらした。ぼくは小さく右手を上げる。

「ユウナに同感……。バビロン王朝がぼくたちの出会いにどう関わってくるのか、説明できるんなら説明してほしい」

本気で、説明できるんだろうな？

と思ったのだが、ハクはまったく動揺する様子もなく「ふむ」とうなずく。

「語ってもいいが、どんなに短縮して話しても文庫本一〇冊分を軽く超えるぞ？ いいのか？」

ああ言えばこう言う。口の減らない男だった。

「まったく……ハク、どうしてあなたはそうなのよ？ 頭いいのに、なんでその卓越した知能を無駄な面白くもない冗談だけに費やすの？」

「ええ？ 面白いよ？」

「どこがっ！」

「言葉の並び具合が爆笑ものじゃない？ こう、絶妙な単語の並び方なんか、爆笑物よ？」

平然と、どこか陶然とした面持ちでつぶやくチコの様子を見て、

ユウナは頭痛を抑えるように顔をしかめた。

「あーもう、この二人は——っ、キョウちゃんっ！ キョウちゃんからも何か言っちゃって！」

え？ いきなりこっちに振りますか？

困ったな。ユウナとほとんど同じ意見だけど。チコのが感覚が理解できないのは今に始まった話ではない。知り合ってからずっと、チコはこんな調子だった。よくわからないところで笑い、ハクにくっついてる。いつもの、どこかちぐはぐな、しかし穏やかな情景。

澄ました表情のハクに、満面の笑みを浮かべて抱きついていってチコを見ていると、自然と。

「二人とも仲がいいね」

そんな言葉が浮かんできたりして。

「えへへっ」

チコは笑い、ハクはむつとりとしかめ面。ユウナも顔をしかめて。
「ああっ。なんか悔しいわっ。キョウちゃんっ！ 私たちもいちゃいちゃしょっ！」

ぼくに飛びついてくるのだった。

「うわっ。重っ。てか、暑っ！ ユウナ、離れろっ」

「ひ、ひどーいっ！ なんてこと言うのよ。キョウちゃん、冷たいんだから」

「冷たくて結構。ほんとに暑いからどけてくれ」

「だめよ。キョウちゃん平均体温低いんだから、暖めなくちゃ」

「ちょ、ちょ、ま、マジでやばい。ま、まてっ。服の中に手を入れんなっ！」

「あはははっ。剥いちゃえっ」

ユウナの行動は次第に危険なレベルにまでエスカレートしていった。ぼくは本能的に身の危険を感じて、本気で跳ね除けようと、腕に力を込めた。びくりともしなかった。

うあ、なんて馬鹿力な娘だ。

ぼく一人じゃどうしようもないと感じ、これまでのやり取りを部屋の隅で黙ってずっと眺めていたシュンに助けを求めることにして、悲鳴交じりの声をあげた。

「シュンっ！ 助けてっ！」

ぼくらの会話には決して加わろうとはしない、けれども常に傍にいる寡黙な少年、シュン。シュンはぼくの言葉に反応し、わずかに顔を上げて周囲の状況を分析するかのようにはばし観察する。

やがて答えが出たのか、小さくうなづく。

そしてそのまま目を閉じて動かない。

何を言うでもなく何をするでもない。

ただ、傍にいる。

幼い頃からシュンはずっとそんなやつだった。

究極の放置主義者。

「シュンくんの許しも出たから、二人で愛の世界へレッツラゴーッ！」

「やめれーっ！」

――以上。

回想終了。

その後、改めて語られたハクの話では、ぼくらはやたらと危機的状況にあって、その原因はほとんどハクがもたらしたものだのだが、成り行きで関わってしまったぼくはほとんど一人で何十人も人間と戦ったような非常にバイオレンスの吹き荒れる物語で、ぼくはなんとなく思い出していまい、凄く憂鬱な気分になり、どうしてあまりよく覚えてないのか漠然と理解して、人間の記憶力の都合のよさに感心してしまうのだが、それはまた別の話。

それはいつかの日常。

当たり前の日々。

ぼくらは世界から取り残された異端で。

それ以上に互いが互いにとって異端であつたからこそ。

過剰に。必要に。真剣に。

仲間を、友達を、友情を、愛情を、または、恋人を、演出し合つたのだろう。

互いにどこかすべてが演技だと気付いていた。

一つになれない、冷めたつながりを感じていた。

『1+1=2』なんて、単純な数式は当てはまらない。

一つ一つの『1』にはそれぞれ異なる個性があり、異なる存在でしかないのだと、気付いていた。

数学的な記号なんてものは、デジタルなコンピュータの世界にしか存在しないものだと思っていた。

それは一個のりんごと一個のみかんを合わせ、無理矢理？2？とするようなもの。

2にはなれない。

2という、ひとつにはなれない。

一度世界から弾き出された同士だったからこそ、より過剰に、より強固に、日常を、世界を、つながりを演出しようとしたのだ。きつと。

それがとても危ういバランスだったと、気付いて見て見ぬふりをしていた。

果ての崩壊は、すべてがあるべくように壊れた、予定調和的な崩壊劇は、本来ぼくらとは、何の関係もないはずの、ある一つの殺人事件から始まった。

それはある春の朝――

Chapter 1 朝の後／一日目 その1

目が覚めてここがどこだかわからない、なんてことは、ぼくに限って言えばよくある話で。

だから見知らぬ天井が飛び込んでこようと、腹の上に誰かの頭と腕が乗っついているように、頭が二日酔いで鈍くとも、昨晩の記憶が判然としていなくとも、特に慌てることはなかった。

体を起して周りを見る。

八畳ほどの部屋の真ん中に小さな炬燵。

ぼくは、炬燵に両足を突っ込んで眠っていたようだ。体に掛かっていた毛布がずれ落ちていく。

炬燵やそこの絨毯の上に散乱する、ビールやチューハイの空き缶。ウイスキーらしき液体の入ったコップ。パックの焼酎。ワインの瓶。チップス。チーズ。イカ。マメ。ソーセージ。溶けきった元水であるところの水。——こんなに飲んだっけ？

室内に人は、ぼくを含めて五人。

「えっと……」

つぶやいて、ぼくはゆっくりと昨晩の記憶を思い出そうとする。記憶は濃霧に覆われたように、曖昧に霞んだままだった。思い出せない。だが、その代わりにゆっくりと思考力が戻ってくる。

入り口のドアに背中を預けて眠る黒服の巨体は、シュンだろう。ぼくの相棒。寡黙な幼馴染。シュンは起きている時でも黙ってじっと動かないので、その姿は背景に溶け込んだかのように自然だ。

向かい側で眼鏡をかけたまま仰向けに倒れ、眠っているのはハクだ。ハクの寝姿なんて、初めて見た。何か、すごく違和感がある。普段は常にどこか超然としていて、機械のような印象を抱かせるハク。無防備に寝ている姿は似合わない——けど、どこか可愛らしく感じられた。

ぼくと同じく、眠るハクを可愛らしく感じたのだろうか？　ハク

の右側に、抱きつくようにして眠っている少女がいる。うつ伏せに。よくうつ伏せで眠れる。苦しくないのだろうか？ 見た感じ、普通に息をしているようだし、起きる気配もないし、きっと平気なのだろう。誰だろう？ 斑のほとんどない、綺麗な茶髪。褐色の肌。たぶん、チコだ。ハクに好意を寄せている女の子は多いけれども、抱きつくことを許されている女性は、ぼくはチコと、あと一人しか知らない。

ユウナ。一度も脱色したことがないという、綺麗な漆黒の黒髪。白すぎる透明な肌。なぜか彼女は、ぼくと同じ炬燵の辺に腰まで入っていて、同じ毛布を頭まで被っていたりする。ハクに抱きつくチコと同じように、ぼくに抱きついて眠っている。小さな寝息。長い黒髪と、細い二つの腕が、ぼくの腹に掛かっている。

「あ……えっと？」

なぜ、こうなっているのか、状況がわからず、戸惑いの声を漏らす。

「ん……う、ん……」

ぼくが動いたためか、妙に色っぽい声を漏らし、ユウナが身動きする。

しかし、反応はそれだけで、すぐに規則的な寝息を立て始める。

なぜかほっとして、胸を撫で下ろす。

なんだか、変な状況になっているぞ、と。ぼくはハクとチコに視線を向ける。

線対称。炬燵を境にして、ほとんど同じような態勢。ぼくとハク。ユウナとチコ。鏡の向こうの、光景。

いや、なんだこれは。

ハクとチコならばともかく、ぼくとユウナはそんな関係じゃない。決して、ない。ありえないと言い換えてもいい。ならばどんな関係かと問われると、友人、友達、親友、その言葉の範囲内の関係であると、断言できる、はず。ひどく焦った気分では着衣を確かめて、乱れてはいるものの、昨晚のままのジーンズとシャツであるこ

とを確認して、ほっとする。ほっと、息を吐くと、何やってんだ、自分は、と、ひどくバカバカしい気分襲われ、脱力する。

脱力して、ふと目をやった部屋の隅のミニコンポのデジタル時刻表示はAM05・48。

「うわ、早っ」

思わず漏らして、果たして昨日は何時に寝たのかと考えていると、次第に昨日の記憶が蘇ってきた。

いつものように新天地町・湾岸第三公園に集まったばかりは、満開になった桜の木の下で宴会を始めたのだった。

始まりはぼくを除いたいつものメンバー四人、ハクとシュンとユウナとチコ。剣術の道場へ行って、ぼくが少し遅れてきた時には、まだそれほど公園に人の気配はなかった。だが、次第に湾岸第三公園を拠点としている他のチームも参加してきて、どこで噂を聞いてきたのか、近所のチームも集まってきて、結果、一〇〇人近い大宴会へと発展していったのだった。

……一〇〇人は少し大げさかもしれない。酔いも手伝って、数量感覚が麻痺していたのかも。けど、少なくとも、さして大きくもない公園に、普段の十倍近くもの人数が集まって騒いでいたことは確かだった。何だって、そんなに人が集まってしまったのか、今思えば少々不自然に思える。花見とはいっても、園内に桜の木は三本しかなかったし、それも大して見応えのあるものでもなかった。少し歩けば隣町の京橋川沿いの土手に、それはそれは見事な桜並木があって、例年通りならば皆、そこに集まって宴会をするのだ。

何とか理由らしいものを考えてみると、思い当たる節はある。ばかりのチームのメンバーは、前述の五人だが、その中でもハクは、ここら一帯、素土の町中にあるロドレンのチームからかなり頻繁に相談ごとを持ちかけられている有名人だった。普段でもハクにご機嫌伺いの挨拶に来る者は多い。年に一度の花見ともなるとなおさらで、そもそもそれが鬱陶しいという理由で、わざわざ定例の宴会からは外れて、いつもの公園でささやかに楽しんでいた、はずだった

のだ。それがどういうわけか、聞きつけてきた人が集まって、小さくもないが大きくもない公園。一気に膨れ上がった人口密度に圧されるはめになったのだった。

誰も桜なんて見ていない。見る者はいない。

滑り台をステージにして、歌ったり踊ったり、時には狭い空間でアクロバットなダンスを競い合ったりもしていて、見ていてなんだかひどく危なっかしい。飽きることだけはしないが。てんでばらばらに飲んだり食べたり騒いでいる間にも、ハクに挨拶に来る人間は途切れることもなく、それがまた、大変な混乱を生んでいた。

さすがにうるさくなりすぎたことで、ぼくらは避難することにして、コンビニで酒やつまみを補充しつつ、隣町の港灣町にあるユウナのマンションに転がり込んだのだ。

「……そっか、ユウナのマンションだ」

思い出すと、ちゃんと記憶にある部屋だと気付く。

学生の身分にしては破格な2Kの部屋。八畳の和室と、八畳半相当の洋室。風呂・トイレ別。エアコン、CATV、光通信インターネット完備。オートロック。駅から歩いて五分。徒歩十分の範囲内に、コンビニ、銀行、郵便局、バス停、弁当屋、スーパーマーケット、リサイクルショップが揃っている。家賃は実際いくらなのか詳しくは知らないけれども、やはりそれなりに払ってはいらるだろう、ユウナは、実はお嬢様。それも、ただのお嬢様ではなかったりする。実はフランス人。

黒髪黒瞳、モンゴロイドの彼女は、一見したところ日本人にしか見えない。

それもそのはず。彼女の両親は共に純然たる日本人。しかし、どういった理由からかはよく知らないが、フランスに帰化していて、現在、向こうで暮らしている。当然、娘であるユウナの国籍もフランスだ。

そんなわけでユウナは、純粋な日本人の血を引きながらも制度上は完全なるフランス人で、今、留学生として日本の大学に経営学を

学びに来ている。

……わざわざ日本に来てまで経営学を学ぶくらいなら、もっと他に良い所がいくらでもあるだろう、とは思いますが、両親にとつての故郷である日本は、やはり何かしら思い入れがあるらしい。日本へ留学することは、ユウナの幼い頃からの両親の願いだったそう。ユウナ自身はずっと向こうで育ったこともあって、日本に対しての思い入れはほとんど皆無に近かった。しかし、両親の願いを受けて、ユウナは日本の片隅、光花市の大学へやってきて、それを両親も喜んだ。その結果がこのマンションと、日本円にして月額二〇万円に近い仕送りと、自動車一台。

「うちの親の日本に対する愛情の賜物ね」

とユウナは淀みのない日本語で皮肉げに語った。

愛する日本を捨て、フランスに帰化してまで彼女の両親が何をしているのかといえば、自家用車を作っているらしい。

メーカーとか、工場で流れ作業によって作られる大量生産の車ではなくて、完全オーダーメイドで、個人向けの、世界に一つしかない車をデザイン、制作する、創造的な仕事なのだそう。何代か前の大統領の自家用車を作ったとかで、あっちではちょっとした有名な人になっているとか。よくわからない。確かにすごいことのように聞こえるが、それだけならば帰化までする必要はないように思える。だからなおのこと、表には出ない複雑な事情があるのだろうと思えた。

ユウナの乗っている軽乗用車も、両親の手による作品。確かに淡いピンクの、流線型でシンプルなデザインの自動車は洋の東西を問わず、どのメーカーのカタログでも見たことのないものだった。

「……そうだ、思い出してきた」

洋室は寝室兼勉強部屋だから、入ってはダメだといわれ、和室の炬燵にぼくとハク、ユウナとチコがそれぞれ向かい合うように座り、シユンはいつものように出入り口付近の壁に陣取って、小宴会を始めた。それぞれの学校のことやら、最近の街の情勢などを適当に話

して、ネタが尽きた頃にユウナが自室から、両親が作っている車の「見本」カタログを持ってきて、広げた。確か、その時の時計は、〇時前。オーダーメイドって言うから、どんな変な車が出てくるのかと思えば、意外とまともな形をしていたこと。ぼくとチコの感想に、ハクが「そもそも車とはー」と語り始めたり。その頃になるとさすがに皆、酔ってきて、支離滅裂になってくる。ぼくの記憶も非常に怪しい。何回かトイレに行った記憶もあるし、なぜだか行かなかったような記憶もある。どっちなんだ？ 何を飲んだのかもよく覚えていない。ビールを飲んだのは公園で、ユウナのマンションに来てからは清酒や焼酎ばかり飲んでたような気がする。ワインの空瓶があるけれども、ワインなんてあったっけ？ ああ、そうだ。途中で酒が切れて「買いに行く♪」とやけに陽気にユウナが出て行って、無言でシュンが追って――たぶんワインはその時に補充されたのだろう。あれは何時のことだったか。あれ？ 二人とも、いつ帰って来たっけ？

ぼくは首をかしげて、腹の上で眠るユウナに視線を落とす。

人の気も知らずに、何が可笑しいのか、実に幸せそうに表情をやけさせて眠っている。

「……つつたく。こっちは朝から頭痛が抜けないってのに」

ぼくがユウナ以上に飲んだということも、記憶が確かなら、ないはずである。それでもぼくが二日酔い気味に頭が痛く、ユウナが平和な表情をしているのは、ユウナの方がぼくより遥かにお酒に強いということなのだろう。

――少し、悔しかったり。

よく考えてみればユウナが買い出しに出かけた時にはすでに、ぼくの記憶は怪しかったのだ。一方でユウナはちゃんと買い出しに行つて、帰ってきている。その一件だけを見ても、ユウナのアルコールに対する耐性の高さは推し量れるというものだろう。まあ、ぼくと比較して、ということではあるけれども。

ともあれ、ユウナとシュンが出て行って、直後ぐらいにぼくの記

憶は消滅している。寝たのだろう。三人で話している間中、ずっとチコがハクにしな垂れかかっていたような記憶はかすかに残っている。その後にユウナは寝ているぼくの脇に忍び込んできて、眠ったのだろう。買出しから帰ってきて……って。

よく観察したら、中身の入っている空き缶が一つもないことに気づく。

ってことは、ユウナたちが戻ってきてからも飲んでいたのだろうか？

うわ、こいつら、一体何時に寝たんだ？

少なくとも一時より前ってことはないだろう。毛布は誰がかけてくれたのだろうか？

こんな殊勝なことをハクやチコ、ユウナがするようなこととは思えない。たぶん、シュンだ。感謝しよう。ぼくはシュンに対して、軽く頭を下げた。

シュンは小さくうなずいて、言った。

「——気にするな。いつものことだ」

めずらしい。シュンの声って久しぶりに聞いた。——って、おい。

「起きてたのかよ」

呆れて言うと、シュンはうなずいて、腕を組み直して、目を閉じた。

それだけ。

起きてるんなら、もうちょつとまともなコミュニケーション取ろうよ、とか思ったり思わなかったり、やっぱり思ったり。

もっとも、シュンは昔からこんな調子なので、今さら指摘するのも詮無きことではあるのだけれども。

しかし、この状況はどうにかしたい。胸の上のユウナを見て思う。起きたいのだが、ユウナを起してしまう恐れがあるので、あまり派手には動けない。実際、ユウナの存在を意識しすぎて、変に体に力を入れ、節々が微妙に痛くなっていることだし。

……もう一度寝ようか？

二度寝。

と、思った瞬間に、トイレに行きたくなってしまった。

やはり昨日は少し飲みすぎた。

シュンに助けを求めるように視線を向けるが、目を閉じ、顔を伏せている。起きているのか、寝ているのか判別不能。

ハクのことを「無防備が似合わない」とか、隙がないみたいに表現したけれども、本当に意味で隙がないのはシュンの方だ。

寝ているのかと思っていたら起きていて、起きているのかと思ったら寝てるも同然で、隙がありそうでない。――いや、なさそうであるのか？ とにかく、二日酔いに苦しんでいる様子はない。しかしシュンは、それほどアルコールに強い方ではないことを思い出す。超然としているように見せているのはただのポーズで、やせ我慢で、目を閉じてうつむいているのは二日酔いに苦しんでいることを悟られないようにしているのかもしれない。

とにかく、シュンには頼れない。トイレに行きたい。

意識すると、喻えようもない焦燥感が込み上げてきた。

やばい。これは非常にやばい傾向だ。まさか、もらしたりはしないだろうが、一刻も早く、トイレに行かなければ。

慎重に、まずユウナの右腕をつかむ。細く、柔らかい手。そーっと、ぼくの上から降ろす。床に置かれる右腕。よし、次は左腕だ。ゆっくりと上げようとした左腕は、だが、途中で何かに引っ掛かったように動かなくなった。見てみるとユウナの右手はしっかりとぼくのシャツの裾を握り締めていた。

しまった。この事態は予測していなかった。ただ単純に、刺激を与えないようにユウナの体を、接触しているぼくの上から除けば済む問題だとばかり思っていたのだ。だが、現実はより厳しく、複雑だった。接触なんて二次元の問題じゃない。接続という、三次元の立体的な問題だ。次元の違う問題だった。ぼくは拳を作るユウナの手を半ば憎しみを込めて睨んだ。

どうする？ 指を一本一本ゆっくりとはがして行くか？ しばし

逡巡。

とりあえず、先に頭を除けることにして、ぼくは慎重に体を起していく。左手でユウナの頭を支え、出来るだけ刺激を与えないように床に下ろす。同時に自分の姿勢も変え、腰を浮かせて、両足を炬燵から抜き、毛布がずり下がるのを自然に任せる。

体から圧迫感が消えた。

思わず息を吐く。しかしまだ油断は出来ない。最大の難関が残っている。ユウナの右手はまだしっかりとシャツを握り締めている。そつと離れれば自然に解けるんじゃないかと思って、ゆっくりと炬燵から離れていくが、シャツが伸びるだけ。どうしたらいいんだろう、まったく。

嘆息。

ぼくの思いつく限り、手段は二つ。

ユウナの指を一本一本確実に、力ずくで剥がして行くか、シャツを脱ぐかだ。

前者の力ずく的手段ならば、ユウナが目覚ます可能性は高くなる。後者は寒いので出来ることならば遠慮したい。

春先。意識すると、冷気が急に身にしみてきた。トイレに行きたい。

しかし、力ずくはたぶん起きちゃうよなあ。宝物か何かのように、異様なほどしっかりと握っちゃってるし。面倒だなあ。だったら、シャツ脱ぐしかないかあ。やだな。他に手段はないものか。ハクだったらいくつか他に手段を思いつくかもしれないけれど。

炬燵の向かいに視線をやると、二種類の視線と目がぶつかった。相変わらず知的な、知的を絵に描いたような、知的な存在感を示すハクの視線。

好奇心に溢れた、楽しそうな、悪戯めいた、小悪魔的なチコの視線。

チコは寝ていたときと同じように当然とハクに抱きついている。ぼくは一瞬困って、困惑して、状況に流されるように、とりあえ

ず、朝起きて知人と出逢った時に行う常識的な言葉を、発した。

「……おはよう」

ユウナを起さないように、声を抑えて言った言葉は、自分でも思った以上にかすかなものにしかならなかった。

「んー？ 何してんの？」

だからというわけでもないだろうが、呆気からんとしたチコの声はやけに大きく響いて聞こえ、ユウナに対する多くの努力をぶち壊しにしてくれた。

「……うう……うん……」

可愛らしい声でうめき、ユウナは寝返りを打つ。ごろりと、半回転し、つられて多くのシャツも伸びる。

しかし、寝返りだけで起きる気配はなく、すぐさま安らかな寝息を立て始めた。シャツを握り込む拳も解かれる気配はない。

しばらく様子を観察し、起きないと確信してからぼくは、ほっと息を吐き、ハクとチコを睨む。

「し……」

小声で「静かにしてくれ」と言おうとすると、言葉を重ねるようにハクが、呆れたように言った。もちろん小声で。

「難儀してるな」

いや、『難儀』って、今の若い子にはそんな硬い表現通じませんよ、ハク様。

しかしまあ、ぼくらはハクの時代めいた物言いにも慣れているわけだ。

「んー？ あ、ああ、ほんと、キョウ、大変そうね、相変わらず」

ハクの言葉で状況に気付いたチコが、やや声を抑えて同情の眼差しを向けてくる。何が「相変わらず」なんだか、よく判らなかつたりするのだけれども、とりあえず声量を抑えてくれたことには感謝しとく。感謝のついでに迷惑をかけようと、握り締められたユウナの手を指して、ぼくは問い掛けた。

「これ、どうにかならないかな？」

主にハクに対しての質問。

チコは軽く首を傾げただけだったが、ハクは小さく、だがしっかりとうなずいた。

「キョウの目的がユウナの手から開放されて自由に動けるようになることだと仮定すると……そうだな、方法はたくさんあるが、とりあえず今のところは実現可能と推定される手段として四つに絞れるな。どの手段も条件は高いが……」

さすがはハクだ。ぼくは二つしか思い付かなかった。

しかも、消去法で選択したらしい。情報のカオスの中を手当たり次第に検索して、無理やりアイデアを探し出し、拾い上げるのがぼくの思考法だとしたら、カオスの中からノイズを消去していったアイデアを自然に浮かび上がらせるのがハクの思考法だ。誰にもできる方法じゃない。ぼくの観察では、世の中の人々は圧倒的に前者の思考で生きている。ハクは特別なのだ。異端と言っても良い。異端の能力の中で、平均的他者よりも有為に働く能力の持ち主を天才と呼ぶのだろう。本人に面と向かって言うことはないが、ぼくはハクのことを天才だと思っている。羨ましくも、何ともないが、ちょっとだけ、尊敬して良いとは思っていた。

「へえ……どんな？」

促すぼくの声から、感心の感情は隠しきれていなかったように思う。かすかな響きに気付いたのか気付いていないのか、ハクは表情も変えずに淡々と語った。

「シャツを脱ぐか、指を一本一本刺激しないように剥がしていくことだな」

それこまではぼくの考えた事と同じだった。

「あとは、時間経過による自然の剥離を待つか……」

ぼくの思い付かなかった一つ。けれども、急いでトイレに行きたい為、無意識に選択外へ置いた可能性だった。——いつの間にか、トイレに行くことを忘れている自分に気付く——が、すぐにハクの言葉が続いたために深く考えることは出来なかった。

「他には、そうだな、ユウナの腕を斬り落とすか、だな」

「なるほど、さすがはハク。その方法は思い付かなかったよ——っ
ておいっ！」

とんでもないことを言いやがった。

「斬り落としてどうするのよ？」

文句が口から転がり落ちる寸前、呆れたようにチコが息を吐いた。
おかげでぼくの文句は行き場を無くしてしまった。胸に溜まり込む、
対ハク戦文句の山。呆れられてもハクは変わらぬポーカークフェイス
で、真面目に言った。

「キョウの業なら、斬り落としてまたつなげることぐらい、出来る
んじゃないのか？」

——それは、ぼくが剣術を学んでいることから来る言葉なんだろう
けれども。斜めに向けられたハクの視線に妙に真剣なモノを感じ
て。

「できねーよ。まったく、これっぽっちも、そんな達人のような、
伝説のような、超人のような真似は、断じてできない」

力いっぱい、全力で否定してしまった。

第一、刀もないし。包丁で斬れっただか？

「そーよ、ハク、斬り落とすのはともかく、くつつけるなんて出来
るわけじゃないじゃん」

チコもびっくりしたように言った。

「なんだ、できないのか。つまらん」

おいおい。

面白いかそうでないかで行動を決めるのか、この男は。

「……本当にできないのか？」

「できないってば。切り落とすのは、ともかくね。痛みなく気付か
れないように斬り落とすことは、ひよっとすると出来るかもしれない
けれど、くつつけるには外科手術が必要」

それでユウナの手がシャツから離れるって保証もないし。

「まあ、冗談はいいとして」

冗談だったらしい。いや、本気で言われても困るけど。それにし
たって、笑えない。

「キョウ、お前、どこまで出来るんだ？」

「は？ 何が？」

「剣術」

今一つ、要領を得ないハクの言葉。曖昧に対象をぼやかしている
のは、何のためにそうしているのかは不明だけれども、たぶん、わ
ざとだろうが。

「あ、あたしも聞きたかった！」

チコが手を上げる。

「キョウちゃん、剣術やってるって言うけど、どれくらいの腕なの
？ 強いのか？ 瓦割れる？」

瓦割りは空手だ。

「藁を斬る程度だよ。それ以上はまだ、試したことがない。瓦は、
たぶん割れない」

見栄を張る理由もなく、正直に答える。師匠が吊らされた牛を斬
るところは何度か見たことはあるが、ぼくにはまだ、危険だと許さ
れていない。刀ですら今のぼくには持て余し気味だというのに、包
丁で斬り落とすなんて、考えることも出来なかった。

「なーんだ。たいしたことないのね」

一刀両断。

……いや、別にいいけどさ。どうせ。本気で剣士になろうとか、
思ってるわけじゃないし。

自慢されようと思って、剣術やってるわけじゃないし。強くなり
たいって思ってるわけじゃないし。

ちよっとした、力制御の一手段としてしか学んでないし。

どうせ暇つぶしレベルを出てないもん。

いいいじ。

「あ、いじけたいじけた」

実に楽しそうに笑われてしまった。いぢめっこだ。

「ふむ。では、ユウナの腕を斬り落とすことはできないか」
ハク。まだ言うか。

「あーよかった」

ユウナ。安堵のため息を吐く。そのキモチは判る、ような気がする。寝ている間に腕を切り落とされるなんて、冗談じゃない。

……って。

「……ユウナ。いつから起きてたの？」

ぼくのシャツのそでを握ったまま、少し考える仕草をしてユウナは答えた。

「んーとね『朝から頭痛も抜けてないのに』……だったかな？ その辺りから」

いつだ、それは。記憶にない。

不審げに眉間に皺を寄せるぼく表情に気付いたのだろう。ユウナは真昼の太陽を思わせる満面の笑顔で応えた。

「えっとね。シュンくんとキョウちゃんの会話の直前」

「ああ、なるほど……って、最初からじゃないかっ！」

ノリツツコミ。

声を上げて文句を言うが、ユウナは一瞬きよとした表情になり、しかしすぐに笑顔に戻る。

「えへへ。キョウちゃーん」

ぎゅっと抱きついてくる。

ごまかそうと言うつもりは、きつとないのだろう。ユウナが抱き付き魔なのはいつものことだ。

ぼくの胸に顔を埋めて。勝手に抱きついておきながら、ふと、不思議そうな表情になる。

「キョウちゃんって、着やせするタイプなのね」

……失礼な。

「起きてんなら、手を放してくれない？」

「やだ」

「トイレに行きたいんだけど？」

「仕方ないなあ。わがままなんだから」

しぶしぶといった感じでユウナは手を離す。「ありがとう」と投げやりに答えておいて、ぼくはトイレに向かう。

向かおうとして、また障害ひとつ。ドアを背に、目を閉じているシュン。

「シュン。どいてくれない？」

訊くが、反応がない。

あれ？

変だ。おかしい。ユウナならともかく、シュンがぼくの言うことを聞かないなんてありえない。

「……シュン？」

不審に思っ、耳を顔の傍に近づける。小さな、規則的な寝息が聞こえてくる。

「……二度寝かよ」

ぼくはひどく疲れた気分になって、ため息をついてその場に座り込んだ。

こんちくしょう。

Chapter 1 朝の後／一日目 その2

それからまあ、トイレ行ったり起きたり朝食をでたらめに漁って食ったり、いろいろあつて、ユウナのマンションを出たのは八時過ぎだった。

光花市南区、南西部にある街。華沙良町から港湾町、新天地、元島町に至る一帯は、昔から素土の街と呼ばれている。

住所には載らない地名。ぼくらの暮らす街。

例えばぼくらが毎日のように集まる湾岸第三公園の住所は『光花市南区新天地四丁目2-1』といって、そのどこにも『素土』なんて文字は出てきやしない。

大昔、戦前のこと、まだこの町が光花市に併合される前までは、実際に素土町という町があったんだそうだ。住所でも『素土町5298-3』とか言つて、馬鹿みたいな大きな数字の番地で現わされていたのだとか。

もっとも、新天地は戦後になってから湾の埋め立てによって出来た新しい土地だし、基島町にしてもその名の通り、今は埋め立てられ地続きになっているとはいえ、元々は光花湾に浮かぶ小島だったわけで、ひっくりかえりて素土の街とするのは少しおかしいような気がする。大雑把というか、大らかというか。細かいことを気にしても仕方がない、ということなのだろう。

名前といえば港湾町はちよつと変なことになっていて、いかにも港がありそうな名前の町で、確かに戦前はその通り港の町だったらしいのだが、埋め立てによって内地へと追いやられ、海と接している場所などなくなっていたりする。今現在の港は、新天地にある。もっとも新天地町は、湾にあった小島の三つか四つぐらいを飲み込んで、いまだに広がり続けていたりするので、港しかないというわけではないのだけれども。

ともあれ、素土という名前の地名は今現在この時代、存在してい

ない。

駅名とバス停にその名残りを残している他は、後は地図の上に薄いゴシックで書かれていたり、光花市を横断するバイパスのインターチェンジに残っていたり、街外れの食堂の看板に掲げられてたり、商店街の名前だったり、公園の名前だったり、図書館の名前だったり、学校の名前だったり、旅館の名前だったりするだけで、あれ？なんだ、けっこう残ってるじゃないか。

とにかくまあ。

そんな様々な地名の不思議を醸し出しながら、ぼくらの街、素土はあった。

マンションを出て向かうはいつもの新天地湾岸第三公園。さすがに昨日、放置して逃げた公園のことが気になったからだ。

新天地湾岸第三公園は住宅地の外れ、かつての島の名残、小高い丘の麓にある。こういった若者が集まる公園ってのは地域住民とのトラブルの元となるものだが、ここではぼくらのチームが作ったルールが上手く機能していて、目立ったトラブルもなく、住民たちとは比較的良好な関係を築いていた。特に何チームかの当番制になっている町内清掃の評判は良く、時折差し入れなんかも貰うほど、異例ともいえる友好な交流が続いていた。

けれども、昨日は少しまずかったと思う。

公園にまさか、あれほどの人数が集まり、お祭り騒ぎになるとは思わなかった。近所の人たちにとってはいい迷惑だったろう。もちろん、花見の事前連絡もしていなかったし。

下手な対応をすれば、これまで築き上げてきた信頼関係を一気に崩しかねなかった。

ユウナとチコは散らかしたユウナ宅の片付けに残って、ぼくは、ハクとシュンの三人で公園の様子を見に行くことにした。

ユウナのマンションは北側の港湾町にあるので、新天地町の外れの公園まではかなりの距離がある。ぼくらは春の風を涼みながらのんびりと歩いていた。

「まあ、惨状が想像ついて、なんかヤだけどね」

公園の現在の情景を、なんとなく想像してしまう。すると、ハクはしかめっ面で応じた。

「そうだな。散乱する空き缶。放置された袋類。タバコの吸殻。乱闘に使われたバットを初めとする武器類。ナイフ。棍棒。鎖。そこから吐き散らされたゲロ。使い捨てられたコンドーム。ふむ……桜の木の枝が折られてなければ恩の字だな」

「……やめろよ」

ハクの想像はリアルすぎた。

「いざとなったら、来てた連中を捕まえて掃除させればいいさ」
事も無げにハクは言う。

……まあ、そんなところだろうと、ぼくも思う。

光花市南区の華沙良町、港湾町、新天地、基島町の一帯——通称『素土の街』に住む異端の子供〈ロドレン〉たちは、現在クレストと言うチームの下に統合されている。ハクは《クレスト》の現リーダー・フジヤと二年前まで同じチームにいた。今もハクはフジヤとは個人的な交流があり、そのため、わずか五人のチームの一員という、現在のハクの立場からは想像もつかないほど強大な影響力を持っている。昨日の花見大会の一件はハクの力的一端でしかない。挨拶に来た連中を集めて、掃除させる程度のことならば余裕で出来るだろう。

ぼくはこっそりとハクの横顔をうかがった。

特にパツとした所のない、印象の薄い顔。どちらかと言えば整っている部類に入るだろうか？ 真面目にしてればそれなりに見えるのだけれども、普段いつも本気か冗談かわからない口調と表情でいい加減な蘊蓄をかましてる姿からはとてもではないけれど、一説によると一万とも言われる素土の街中の青少年たち——ロドレンに影響力のある人間とは、とてもではないが思えない。

一年ほど前に知り合って、成り行きでずつとつるんでいるのだけれども、ぼくはいまだにハクの性格をつかめた気がしない。

ま、それはユウナだろうと、チコだろうと、幼稚園の頃からの付

き合いがあるシュンだろうと、似たようなものだけでも。

ちらりと後に視線を向ける。

並んで歩くぼくとハクの後を、三メートルほどの距離を保ってシュンがずつとついてきている。

シュンは決して喋れないわけじゃない。幼い頃はもう少しいろいろと喋っていたような記憶もあるけれども、年々口数が減っていく。今では、失語症のように、言葉が必要な時ですら、滅多に喋らない。かと思えば何の意味もないところで、唐突に喋ったりする。

話をしないから、どうしてもシュンがずつとぼくに付いてきているのか判らない。幼いころから、ぼくがどこへ行こうと、シュンは黙ってついてきた。それは、ぼくが地元を離れてここ、素土の街にやってきても、同じことだった。もうぼく自身、それに慣れてしまつて、当然のような気になっているが、客観的に考えて見るとこれは、かなり異常なことなのかもしれない。実感はないけど。四人の仲間はみんなそれぞれ複雑な性格をしているけれども、シュンが一番理解不能かもしれない。まだしも理解できるのは、チョコ入り饅頭フリークという、邪道な好みだけだ。

付き合いが一番長いけれども一番理解できていないなんて、ひどく逆説的で面白いと思ってしまった。

新天地町に入り、コンビニの角を曲がり、丘へと向かう直線道路に入る。

いきなり拡がった光景を見た瞬間、初めはまだ宴会が終わってないのかな、と思った。

たくさんの少年少女——ロドレンたちが道路に溢れていた。

「……あれ？」

疑問の声が、自然に口をついて出た。

若い人だけじゃない。道路には、もう少し年輩の人たちもいた。とてもではないがロドレンには見えない三〇代、四〇代、五〇代——の、地域住民の皆様。見覚えのある顔もいくつかある。普通、若者と年輩の人が一緒にいる場合、何かトラブルが起きているのだと

相場が決まっている。ぼくもそう考えたのだが、若者たちも地域住民たちも一様に抑えた声でそれぞれ固まって、道路の先に視線を送っている。道路の先。ぼくらの、公園。

赤い回転灯が回っていた。

「――警察？」

つぶやき、ぼくとハクはほぼ同時に駆け出した。

すぐ跡を追ってくる、シュンの気配も感じる。

いやな予感がした。

「……乱闘でもしたか？」

思いつくのは、日常的なもの。

けれど、仮にそれで周囲の住民たちに被害が及んだのならば、ぼくらは最悪、公園を出入り禁止になる。

駆けてくるぼくらに気付いて、一人の少年が声をかけてくる。前髪に紫のメッシュを入れている童顔の少年に、ぼくは見覚えがあった。

「あっ、ハクさん！ キョウさん！」

――確か、素土の街最大のチーム《クレスト》のメンバーだ。名前は思い出せない。

「どうした？ 何があった？」

ハクが珍しく積極的に動き、情報を求める。

「フジヤさんに知らせてきます」

といって、少年は走って人ごみの中に消えていってしまった。

「……人の話、聞かないかなあ」

ぼくはぼんやりとつぶやく。ハクは軽く肩を竦めて、少年の跡を追って、歩き始めた。

公園に近づくにつれ、人並みが二つに分かれる。

人並みが分かれて出来た道の真ん中を一人の青年が悠然と歩いてきた。背後に一八〇を越す長身の、男と女の護衛を引き連れて。護衛の男女は、双子のようにそっくりの容姿をしていた。スーツのようなストレートのパンツ、白いシャツの上にベストを着て、頭にベ

レー帽を乗っている。違いは色だけ。男の方は青の、女の方は赤のベストとベレー帽。

顔の形すらもそっくりだった。二卵性の双子らしい。二卵性にしでは似すぎるほどに似ていたが、それは表情の醸し出す雰囲気がつくりなため、その通りに見えるだけなのかもしれない。しかし、性別が違うというのに背の高さまでが同じと言うのは、どこか逆に不自然で、不思議な感じがする。男の方が「アオ」で、女の方が「アカ」と言う。見た目そのまんまだ。

一方、二人を先導する青年は、それほど背は高くなかった。がっしりとした体格の持ち主だが、精々一七〇を超えた程度だろう。しかし、堂々とした歩調と全身から醸し出される存在感が青年をより巨大に見せていた。普段はどこは人懐っこい表情を浮かべていて親しみやすい感じがあるのだが、今日はその存在感を威圧的にまで高めていて、人を寄せ付けまいとしているようだった。

フジヤ。《クレスト》のリーダーで、素土のストリートの子供たち、ロドレンたちの王。異端の主。

「――ハク、キョウ」

それほど大きくはない、しかし良く通る声は、どこか深刻な響きを含んでいた。

「フジヤ。何があった？」

「殺人だ」

簡潔なハクの問いにフジヤは簡潔に応えた。

ぼくは息を飲んだ。

「殺人だって!？」

フジヤは頭を縦に振る。

「シホって子を知ってるか？」

「――どの『シホ』？」

「……あー、タダシのチーム……《銀の弾丸――Silver Bullet》の。あのチームの娘。タダシの女だ」

ぼくは、思い出す。

「……ひよつとして、シヨートの娘？」

「ああ」

知っているも何も、それは――

タッタッター♪

唐突に掻き鳴らされる軽快な音楽。

Y・M・Oのライディーン。

四〇和音の携帯の着信音。

「もしもし？」

『あ、キョウちゃん。ちょっと買ってきて欲しいものがあるんだけど』

ユウナからだった。

『あのね、コンビニでね……夜用のゴムを買ってきてほしいの！』

「あ、あのな――」

『え？ 何に使うかって？』

「ちょっと、ユウナ」

『そ・れ・は・ね……ナ・イ・シヨ！』

「……」

『あれ？ おーい。キョウちゃん。ノリが悪いぞー！』

「……あ、あのさ、ちょっと今、そーゆーノリじゃないんだけど」

『ん？ ほえ？ 何？ 何かあったの？』

「あのさ、シホって娘、いたでしょ？ 一昨日、ユウナとチコと、

三人で遊んでた」

『シホちゃん？ 《ギンダン》の？』

ギンダン？ ああ、銀の弾丸。《Silver Bullet》か。

『シホちゃんがどうしたの？』

「えっと……あの……死んだんだって」

『へ？』

「……」

『またまたあ。笑えない冗談言っちゃって』

「いや、ホント。ぼくが確認したわけじゃないけど。冗談じゃないっぼい。警察来てるし」

『えっえっえっ！』

しばらく電話越しにバタバタとした音が聞こえてくる。

どたんがたんと、何かが倒れる音。

何をやってるんだ？

『ど、どこでっ？』

ユウナの声はさすがに動揺していた。

「公園で」

『どういことよっ！』

「いや、ぼくも今聞いたばかりでよく……」

『今からそっち行くから待ってて！』

プチッ。ツー、ツー、ツー……

非常に慌しかった。

携帯電話を呆然と見下ろして、ぼくはフジャたちの視線に気付いた。

「……というわけで、ユウナたちの友達らしいんで知り合いではあるんだけど……、何があったの？」

「わからん。殺されていたのは公園じゃない。丘の中だ」

「丘の中？ 何だって、そんな所に……って、決まってるか」

公園の背後には、ここ一帯が元々島だった時の名残——小高い丘になっている。

頂上付近にある岩場を除いて、全体的に木々が覆っている。一応、山道らしきものもついていて、湾岸町側に抜けるようになっていたが、見通しもあまりよくないので、ほとんど通行はない。そもそも、あまり大きな丘でもないで、麓を回った方がかえって時間の短縮になるほどだ。明かりのない夜になると、人通りはまったくなくなる。

逆に言えば、それはこっそりと隠れるには、絶好の場所、ということだ。

祭の現場を離れて人気のない丘に登っていくのだ。やることは、だいたい想像がつく。

が、フジヤは首を左右に振った。

「それもわからん。発見者はタダシだ」

「……犯人？」

「さあな。演技には見えなかったがな」

演技……？ ああ、発見した時の、タダシの様子か。どういふことだろう？

タダシはシホの恋人だ。ぼくは、あまりよくは知らない。だが、フジヤがそういうので、その情報は確かなものなのだろう。

タダシが第一発見者で、犯人ではないとするならば、祭りの夜、恋人であるはずの二人は、別々にいた、と言うことだ。

……よくわからない。

「ふむ……」と、ハクがうなずいた。何かわかったという表情をしている。

「痴情のもつれ、ってわけじゃないのかもな」

「だろうな」

ハクもフジヤも二人だけで何かを納得しているようだった。なんだろう？ 少し考えてみようとしたけど、わかるはずもなく。

「何か知ってるの？」

訊ねた。

ハクは少し迷ったように視線を宙に彷徨わせたが、すぐに口を開いた。

「少しな。《Silver Bullet》にはしばらく前からよくない噂があつてな」

「ほー」

「それはそれはよくない噂があつたんだ」

いや、だからその噂は何？

訊こうと思ったけれども、故人の名誉ってこともあるし、ハクは
確証のない噂を無責任に垂れ流すようなやつでもないので、訊くの
はやめた。気にはなっただけでも。

Chapter 1 朝の後／一日目 その2 (後書き)

……これ書いてたころは、スマホなんて影も形もなかったんですね。
え。

Chapter 1 朝の後／一日目 その3

結局ぼくらは公園へは行かず、ユウナのマンションへ戻ることにした。

今公園へ行ったところで混乱に巻き込まれるだけで、何も得るものはない、と考えてのことだった。

公園の様子は気になったが、今は人が多すぎるし、ぼくらでは何をどうした所で、どうともなりはしないだろう。その辺は警察か、それが無理ならフジヤが何とかするだろう。警察はそれが仕事だし、フジヤの《クレスト》にしてもそれは同じこと。街のロドレンたちが嵌めを外しすぎないように統制する。そのための《クレスト》だ。フジヤには詳しい情報が判り次第知らせてくれるように依頼した。

帰る途中で走ってくるユウナたちに会った。彼女たちは当然詳しい情報を知りたがり公園へ向かおうとしたが、ぼくらは何とか説得して引きずるように連れて帰って来た。

マンションの部屋に入ると、部屋の状況はぼくらが出てきた時とほとんど変わっていないように見えた。

曰く、散乱するビールの空き缶、缶チューハイ、焼酎、ワインのボトル、スナック菓子、つまみ類の空き袋。

「……お前ら、何やってたのさ？」

「んー？ 朝ごはんの食器洗ってたのよ？」

平然とチコ。

台所の方へ、視線を向ける。なるほど。本当だ。食器だけは綺麗に片付いている。しかし、それだけにしては少し時間がかかり過ぎてないか？

「乙女には秘密の時間が多いのよ」

とユウナ。

ああ、そうですか。ぼくにはよく判らない。

秘密——にしていることくらい、一つや二つ、それなりにあるけれ

ども、秘密に時間とられることなんて、今のぼくにはないし。

「しかし、改めてみると、本当によく食ったな」

嘆息するハクに引きずられるようにぼくはぼんやりと部屋を眺める。食べ物はともかく、飲んだ量はとも五人分とは思えない。いつこんなに飲んだのだろうか。昨夜に決まってる。微妙に記憶はないけども。

「――っか、ワインなんて飲んだ記憶がないんだけど」

「ええー？ キョウちゃん覚えてないの？」

「何を？」

「昨夜、キョウちゃんがわたしに無理やりワインを飲ませて、酔っ払って動けなくなったわたしを……」

「いや、もう冗談はいいからさ」

「……ちえーっ」

全然、テンション変わってないし。ユウナは。

――人が死んだというのに。

友達が死んだというのに？

拗ねたようにふて腐れるユウナを見ると、なんだか、夢の続きのようで――夢なんて見なかったけれども――二日酔いの続きのようで。

「……なんか、実感ないね」

ぼんやりとつぶやいたチコの言葉は、たぶんその場にいるぼくらに共通した感情だった。

本当に死んだのか？

ぼくらは死体を見ていないし。ぼくらは現場を見ていないし。ただ、集まっている人と、警察のパトカーを見ただけ。

本当に死んでいたのか？

本当のパトカーだったのか？

別の理由で集まっていた可能性は？

ぼくらはフジヤの証言を聞いただけ。

フジヤたちの狂言でないと言う根拠はあるのか？

そう考えると、ぼくらを見つけるなり質問にも応えずフジヤを呼びに行ったあの少年の行動は、ひどく怪しげな、伏線のように思えてくる。

いや、そんな馬鹿な話はない。フジヤにはそんな手の込んだ悪戯を仕掛ける理由がない。

——理由がない？

なぜそんなことがわかる？

他人のことなのに。

所詮は、他人のことにすぎないのに。

行為の理由は、絶対的な理由は、その行為者以外には知りえないものののだし。

ぼくら第三者にできることはただ想像だけ。

だから。

想像してしまう。

まるで仮想現実のように曖昧な境界。

夢のように、夢であるかのように、現実の情景が像を結ばない。

「真実かどうかであるかは——」

と、ハクがテレビをつける。

NHKのニュース番組。ちょうど都合よく、地方ニュースが始まっていた。計ったような、胡散臭さを感じるタイミング。どこか見覚えのあるテレビのアナウンサーは平坦な、落着きを払った声でニュースを読み上げていく。それこそ、どこか異世界の、仮想現実の出来事を語るように。

『今朝未明、新天地町郊外の新天地第三公園付近の林の中で、女性の遺体が発見されました』

けど、ああ、それは間違いない。

それは確かにぼくらの公園のことで。

『遺体は付近に住む女子高生。寺田志保さん、十七歳と見られてい

て——」

確かにぼくらの知るシホのことで。

『昨夜は公園内で若者グループによる集会が開かれており——多くの人が集まっていました。誰も志保さんの殺害現場を目撃したものは——』

確かに昨夜の出来事を示したものだ。った。

ぼくが何を思おうと。何を考えようと。想像しようと。夢想しよう。

どうあがいても現実には現実でしかなく、仮想現実の入る隙間は微塵もないと、ニュースは伝えているようだった。

淡々とアナウンサーの声が流れる中、ぼくらは奇妙に沈黙し続けた。

現実だろうと、どれほど現実であろうと、現実感がないことだけは、確かな現実で。

奇妙な不安定感。

居心地の悪さ。

「……どうして？」

沈黙に被せるように、チコが声を漏らした。

「誰がシホを殺したの？ どうしてシホは死んだの？」

ぼくは、ハクを見た。

ハクとフジヤは何かを知っていた。

ハクと目が合った。

なぜかドキリと、心臓が高鳴った。

「情報は正しく伝わらないものだ」

「……それは、何が言いたい？」

「別に……」

ハクにしては曖昧な台詞だった。さすがに少し、動揺しているのかもしれない。だとすると、動揺している自分にきつと気付いているだろう。ハクは、そういうやつだ。

「……正しい情報ほど、早く隠され、都合により改竄されていくと

いう、原理的な問題のことだ。だから、話せない」

「自分で調べろってこと？」

「いや……」

ハクは首を左右に振った。

「正しいと確信できる情報が手に入るまで、シホのことは少し待ってくれ」

それでハクが何かシホの死の理由に関して心当たりがあると、チコにもユウナにも伝わったが、彼女たちはわずかに驚いたように顔を上げただけで、特に何も言わなかった。

『――光花市役所では、恒例の――』

ニュースはもう次の話題に映っていた。

何かの行事。

誰かの笑顔。

アナウンサーの表情はどこまでも硬質で。

そこにシホの死を匂わせる気配は、どこにもなかった。

「喪服、用意しなくちゃ――」

ユウナがそっけなく、つぶやいた。

Chapter 1 朝の後／一日目 その3 (後書き)

――『Chapter 2 後の死／二日目』へ続きます。

Chapter 2 後の死／三日目 その1

死ぬってどういうことだろう？

戯言のようにつぶやいて。

じゃあ、生きるってなんだよ？

虚言のように投げ返す。

死とは何か？

個人的な意味ならばともかく、絶対的な規範ともなると、生きて
いるうちには誰も追試できないように。

生きる意味もまた、生きているうちは、あまりにも普遍的過ぎる
ため、気付かないものなのかもしれない。

少なくとも、ぼくにとって、生の意味は、死の意味を考えるより
も難しい。

たぶん誰にとってもそれは同じことだと思うけれどもぼくは、そ
れを誰かに尋ね、確かめることはしなかった。

恥ずかしいから。

それ以上にきつと、個人的な意見しか返ってこないだろうと、わ
かっていたから。

シホの死から二日経ったその日の朝、ぼくは葬式に着ていくため
の喪服を探していた。なかった。

実家を出て行った時のことを思い出す。

ほとんど手ぶらで、着ている服だけで、ずいぶん前になくなった
実母の遺してくれた結構な額の入ったぼく名義の預金通帳だけを手
にして、出てきたのだ。

探すまでもなく、喪服なんてもっていないことはわかっていたこ
とだけでも。

どうしたものかと思案していると、昨夜からぼくのアパートに泊
まり込んでいたシュンが、無言でぼくの視界に立った。

高校の制服。学らん。

自分の姿を見せ付けるように立った、シュンの服装を見て、ぼくは自分がまだ、高校生だったことを思いだした。

——ああ、思い出した。

ここのアパートに住むようになってから数日後、実家から送られてきた荷物の中に、確か高校の制服が入っていた。

高校なんて、もうずいぶん行ってない。卒業したわけじゃないけど。

はて、まだ在籍していることになっているのだろうか？

順調に行けば今年で三年生になるはずだった。

というか、もう四月だ。ちゃんと進級しているのだろうか？

微妙なところだ。出席日数はもちろん足りてないはずだけれども、ぼくの実家は、高校のある地元ではかなり強力な権力を持つ旧家だったたりするので、その権力をもってして父あたりがなんとかしてしまっているのかもしれない。

ぼくとは違い、シュンは頻繁に高校へ通っているようだが、喋らないのでぼくが今、学校でどういう扱いになっているのかはわからない。

何の連絡もないし、ぼくは自分からわざわざ確認に行く気もなかった。

わからないけれども、この際どうでもいいことだった。

押入れの奥から何とか制服を探し出して、着替えている途中でインターホン。

出る前に、シュンは特に何を言うでもなく玄関に行き、ドアを開ける。

いきなりハイテンションな声が飛んできた。

「おっはよう！ キョウちゃんっ！ いっしょに行こー！」

いや、これから遠足に行くみたいに誘うなよ。

ツッコミを入れようかと思ったけど、ユウナは出てきた人物がぼくじゃなくてシュンだったことにひどく驚いたようで、玄関先で絶

句していた。

「わ、わ、わっ。どうしてシュンくんが出てくるかな？ キョウちゃん……って、キヤーツ！ キョウちゃん何してるのっ！」

部屋の中を覗き込むようにして見たユウナが、近所迷惑な悲鳴を上げる。

「な、な、なんで服着てないのっ！」

「着替え中だってば。誤解を招く言い方をするな」

着てないといっても、当然上半身だけだ。裸じゃなくて、下着はちゃんと着けている。普通に答えたのだが、ユウナは聞いちゃいなかった。

「いやーっ。そ、そんなっ。裸なんてっ。ふ、不潔よーっ！ シュンくんと二人きりでいったい何をしてたのーっ」

「待てっ！」

「こ、こんな朝早くから。はっ、まさか泊まり？」

「いや、泊まったんだけど、それは——」

シュンはただの幼馴染で。昨夜はなんか、帰るのが面倒そうだったから——

「ええーっ！ ととととととと泊まり！ だめっ。一晩中なんてっ！ ああ、裸で。いやらしいわっ。あんっ。いやっ。そこは止めてっ。触らないでっ。あっ、あっ、あっ、せめてシャワーを浴びてからっ」

——うわっ、錯乱してやがる。

ああ、近所迷惑どころか、変な噂が立つの、確実。

アパートから追い出されたらどうする。どうしよう？

そうしたら、しばらく、ユウナのマンションに泊めてもらうかはっ。

さては、それが策？

「あんっ。そんなっ。強引なんてだめえ。もっと優しくっ。はじめてなのっ。あ、ああああっん♪」

ユウナの錯乱がますますヤバイ方向に進み始めたころ。

「シュン、やって」

ぼくの合図とともにシュンは拳でユウナの頭を殴った。

ベチツと玄関に倒れたユウナを二人掛りで室内に引きずり込む。

黒い喪服。着物。

皺になったらまずいかな？　とか思ったりもしたけれども気にしないことにした。

黒髪色白のユウナには純和風の着物はよく似合っていた。いかにも、若未亡人って感じで。微妙に色っぽかったりする。

日本人じゃないくせに。

はあ、なんだかな。

ユウナと会話していると、死ぬことだか生きることだか、そんな悩みなんてすごくちっぽけな、どうでもいいことのように思えてしまう。

たぶん、本当にどうでもいいことなのだ。

考えても、考えなくても。

答えを得ても、答えを得なくても。

どうせ当たり前のように生きて、当たり前のように死んでいくのだ。

いつかは、きつと。

今も、きつと。

それから三十分ほどして、特に待ち合わせをした覚えもないというのにハクとチコがぼくのアパートにやってきた。

「ううういったーい」

ユウナが頭を押さえて起き上がった。自業自得なので無視。

「はっ！　いつの間にか、ハクちゃんとチコちゃん出現っ！」

二人に気付いて声を張り上げる。

「何っ？　どうしてっ！　いつのまにっ！　さっきはいなかったのに。はっ。まさか、隠れてた？　隠れてしてたっ？　二人も泊まり？　ま、ま、まさか4P！　いやん。なんでわたしも呼んでくれな

かったのっ！」

まだ、錯乱してた。

「いや、もういいから。ユウナが倒れてる間に来たんだよ」
何でこんなにテンション高いんだこの娘は。

「およ？ そうなの？」

きょとんとした表情でユウナは首を傾げる。ぼくらは一斉にうなずいた。

「なーんだ。時間を跳躍したわけじゃなかったんだ。うう、頭痛が痛い」

がつくりと、ユウナは頭を押さえてしゃがみ込んだ。文法がおかしい。言葉に矛盾。頭を殴られた後遺症かもしれないかった。

「《時間を跳躍》って。あはははっ。ユウナおかしい！」

声を上げて笑うチコ。

いや、何故そこで笑う？

チコらしくはあるけれども、相変わらず笑い所がわからない。

さらに三十分ほどして、ぼくらはようやくシホの葬式に向けて、出発した。

ぼくとシユンは学校の制服。ハクとチコは黒のスーツ。ユウナは黒の着物。

五者五様。みんな、てんでばらばらの格好でまとまりなんてありません。やしない。

なんでぼくのアパートに集まることになったかといえば解答は簡単で、シホの実家にはぼくのアパートが一番近いからだった。こんなことになるまで、ぼくはシホの家がすぐ傍にあることを知らなかった。ぼくはシホとは単純に顔見知り程度でよく知らなかった。チコとユウナが一緒にいるところは何度か見かけたことがあるけれども、どの程度の友達なのかもよく知らない。

ぼんやりとした、死んだ少女の印象を思い出す。

ショートカットのボーイッシュな格好をした活発の少女。

人見知りすることなく、初対面からテンション高く話し掛けてきた――ような記憶がある。

よく思い出せない。ユウナたちはともかく、ぼくはそれほど親しくしていたわけでもなかったし。

街角の建て看板。

白い紙に『寺田家式場』の黒い文字。

ちらほらと、黒い服の人を見かける。

シホの苗字が『寺田』ということも知らなかった。

もつともぼくは、ハクやチコやユウナの苗字すらも知らないし、ハクに至っては、本名ですらないらしい。

理由はよくわからないけれども、ぼくらの仲間の間では、苗字は決して名乗らない伝統があった。

いつからそうなのか、なぜそうなのか、誰も知らない。

しばらく前に読んだ『ライジン』というストリート情報誌によると、既存の社会的枠組みからの脱却を目指すためにまず、本来ならば一番身近であるはずの『家族』という枠組を象徴する『姓』からの脱却を図ったのだとか。

なんとなく納得してしまいそうになる一定レベルの説得力は、何か簡単に踏み込むのを躊躇わせる罫のように感じなくもない。

「……なんだか、しみりしちゃうね」

「いや、ユウナ。今さらそんなこと言ったって、なんか白々しいし」「えーっ」

一瞬でツツコミを入れてしまったけれども、他の参列者っぽい人も道すがらちらほら見かけるために、さすがにユウナも軽口で返してくることはなかった。けれども少し不満そうな表情で、口の中で何やらぶつぶつとつぶやいている。内容は聞き取れなかったが、どうせろくでもないものに決まっているので、聞こえなくて幸いだった。

ハクは今朝から何か、ずっと考えている様子で、うわの空だった。チコは相変わらずそんなハクの表情をずっと眺めては、理由もな

く笑いを堪える仕草を繰り返している。この娘も相当にわからない性格をしている。

わからないと言えぼのシュンだが、ぼくらの最後尾を、周囲を警戒しつついつものように無言で歩いていた。シュンはいつも変わらない。

「……シホちゃん、本当に死んじゃったんだよね」

ユウナの問いに、ぼくは応えない。

たぶん、返答を期待したものじゃないだろうし、そもそもシホを詳しく知らないぼくには、応える言葉もなかった。

「死ぬって、どういうことなのかな？」

それは今朝、ぼくが考えた事。

「わからないよ」

生きていない、ということ。

「死後の世界って、あるのかな？」

「さあ……」

それは、死んでみればわかること。

死んではじめて、実感できること。

「死とは、もう変化しないということだ」

——断言は、ぼくとユウナのすぐ後。

ハクだった。

「死は完全なる静止だ」

「死後の世界なんて、存在しない、ってこと？」

「そうは言っていない。死という階段を経て、別次元の生へ移行する可能性もあると思う」

「……どういう意味？」

「たとえば死後の世界なんかが存在するとしても、それは決して現世の継続ではない、ということだ」

「……?」

ハクの言葉を、ユウナはよく理解できていないようだった。

ぼくも、わからない。チコはわかっているのかわかっていないの

か、何か楽しそうに聞いている。シュンは……まあ、いつもの通り。
「つまり——」

それでも何とか理解しようと、問う。

「——生まれ変わりはありえる、ってこと？」

「ああ、確認はできないけどな。死という完全停止の階梯は、たとえどこか別の世界で生まれ変わったとしても、両世界での連続性が消失するために起きる現象ではないかと思う」

なんだかもっともらしく説明しているわりには本気で言ってるように聞こえない。

「死後も自己を保てるなんてことは、ありえないと思う」

「——それが、ハクの哲学？」

訊ねる。

「いいや、妄想だ」

「……何よ、それ」

ユウナが呆れたように息を吐いた。

「考えても答えの出ない思索はいくら詳細に論理建てようとも、所詮は妄想の域を出ないということさ」

——そうなのか？

そうなのだろうか？

世界のどこかに真実はないのだろうか？

真実と一致する解答はないのだろうか？

何だかんだ言っても、それがハクの哲学だろうし、崇拝する思考の規範なのだろう。

ハクにとってはどうか判らないけれども、ぼくにはどこか飛躍しすぎているように聞こえるし、断定的すぎるようにも聞こえる。いや、妄想だといって、その思索に意味が存在しないと言ってるのは他ならぬハクだっけ？

当然ぼくには、全てに賛同することはできない。
できないけれど。

「変な論理」

それは感想。

「だろう？」

なぜか満足げにハクは笑んだ。

——ハクが納得していればいい問題なのだ。

きっと、誰のためにでもなく。

明確な目的もなく。

ただ自分のため。自分が納得するために世界を考察し、生と死を考える。

自分なりの答えを見つけられればいいのか。

……いや、答えが見つからなかったって。

考えていられる間はそれで十分だし、考えないのならばそもそもそこに悩みは発生しない。

ハクが何を言いたいのかわからなくても。

ぼくが何を考えたいのかわからなくても。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1926y/>

異端－吸血鬼事件－

2011年11月4日11時17分発行